

先行実施生への指導の振り返りから考える 新課程入試に向けた 2年生後半の指導のあり方

数学と理科が新課程での実施となった2015年度入試。

理科への対策が入試の成否を分けた学校も多かったのではないだろうか。

特に、2年生の2～3学期は、入試に向けた準備を整える上で重要な時期となる。

2015年度入試で実績を上げた学校は、この時期をどのように有効に使い、飛躍の足掛かりを得たのか。

学校事例 1

福島県立橋高校

自学自習を重視する指導と 基礎・基本を徹底する指導を両立

3教科で課題量を調整し 学習バランスを保つ

福島県立橋高校は、国公立大に毎年100人以上が合格する進学校だ。2012年度入学生は、1年生7月の進研模試では過去5年間で最低の成績だったにもかかわらず、15年度入試では例年同様の実績を残した。この学年では、3年生5月までに国数英の基礎・基本を定着させることに力を入れ、以後すぐに理科と地歴・公民の学習を本格化できるように工夫した。

また、生徒の自主学習の習慣化にも1年生の頃から力を入れた。例えば、週末課題は内容を精選し、量を例年の半分程に削減。その上で、国数英の教科担当が学年会議で話し合い、生徒の様子や進研模

試の結果などから、気になる教科・科目は課題を増やし、他教科と調整した。この学年で3学年主任を

務めた宮本英雄先生は、「課題の量を増やすばかりでは、こなすだけで精いっぱい生徒や、答えを写すだけの生徒が出てきます。そのため、量を減らしもしっかり定着させられるように、授業の内容と強く結び付いている問題に厳選しました。生徒の状況に応じて量を調節すれば、各教科の学習バランスも保てると考えました」と話す。

朝学習と週末課題で 数学の復習を徹底

2年生1学期の時点では、7月の進研模試で小問集合の正答率の低さが目立つなど、数学の学習内容の定着度に不安があったため、

2学期以降は復習を徹底させた。朝学習では進度を緩めて、1年生の学習内容から段階的に学び直せるように自作プリントを課し、週末課題には基礎の習得を確認する問題を加えた。また、気掛かりな教科・科目の対策に注力するという学年団の方針通り、朝学習では数学に特化して学ぶ週を設け、週末課題では数学以外の教科・科目の量を減らして、生徒が数学の学習に集中しやすい環境を整えた。

「授業を柱とした学習を徹底させるといふ方針の下、国語や英語などの先生方が授業の充実に注力したことで、生徒の不得意分野への細やかな指導が出来たと思います。この時期に基礎・基本をしっかりと振り返らせたからこそ、2年生11月の進研模試で数学の成績が伸びたのだと考えています」（宮本先生）

2年生後半には、理科の対策も始めた。国公立大志望の文系の生徒は、1年生で「生物基礎」、3年生で「生物演習」を履修するため、学習した内容を忘れないよう、2年生の長期休業中に「生物基礎」の復習問題を課した。理系の生徒

には、2学期から朝学習の教科のローテーションに理科を加えた。

「物理と生物は授業の進度がやや遅れていたもので、朝学習の短い時間で効率よく習得できるよう、基礎的な良問を精選しました。生徒の状況に応じて取り組ませ、早めの定着を図りました」（宮本先生）

上位層の姿を通して 中・下位層に自学自習を促す

2年生12月からは、受験生への切り替えに力を入れ、教師が手を離していく指導に重点を移していった。例えば、英語では、朝学習の方法を工夫した。難度の高い並べ替え英作文だけを課し、生徒が復習しやすいよう、出題数は良問を選んで3問に抑え、その日のうちに採点・添削して返却。生徒にじっくり考えさせようと、解答・解説は配布せず、教室後方の掲示板に貼るのみにしたこともあった。そのようにした理由を、3学年の英語担当だった木村哲也先生は、

「10～11月には、修学旅行や3年生引退後初めての部活動の県大会と、2年生が学校生活における責任を

自覚する大きなイベントが続きます。『自分から進んで取り組もう』という生徒の気持ちを高めることで、学習意欲も伸びやすいと考えました」と話す。

ただ、手を離す準備は、1年生の頃から進めてきた。学年集会では「2年生12月を境に受験生になるぞ」と繰り返し伝え、生徒への意識付けを重ねた。また、教科指導にも工夫を凝らした。英語では、先取りする学習習慣を身に付けさせようと、定期考査の1か月前から出題範囲を示した。更に、今後求められるようになる力を実感させるために、夏休みの特別授業では、半年後に受験する模擬試験の過去問題に取り組ませた。

そのような指導にして間もなく、上位層の生徒の学びに変化が現れた。英語では、朝学習の解答・解説が貼られた掲示板の前で、生徒が教え合う姿が見られるようになり、数学では、放課後の教室で自習する生徒が目立つようになった。すると、上位層の生徒の姿に触発される中・下位層の生徒が次第に増え、自学自習の輪は広がっていった。



福島県立橘高校
宮本英雄
みやもと・ひでお
教職歴23年。同校に赴任して11年目。2014年度3学年主任。

福島県立橘高校
木村哲也
きむら・てつや
教職歴22年。同校に赴任して5年目。2014年度3学年英語担当。

◎「自主、自律、自立」の校是の下、真理を探究する精神と豊かな情操を培い、国家や社会の有為な形成者を育成する。◎全日制／普通科／共学／1学年約320人◎2015年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、北海道大・東北大・福島大などに151人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ422人が合格。

「手を離せば、上位層の生徒は学びに向かうと信じていました。ただ、不安もありましたから、生徒の様子は以前同様すっかり見守り、自主的に学習できるようにになれば、すぐに授業で褒めました。教師に努力を認められた生徒は喜び、『もっと頑張ろう』と思うでしょう。『自分も認められたい』と努力し始める生徒を増やすことにもつながったと考えています」（木村先生）

理科と地歴・公民の学習を 3年生6月から本格化

3年生では、4月のスタディー

兵庫県立加古川東高校

模試成績の反省点から、指導を転換
上位層を伸ばし、基礎・基本も徹底

サポートで国数英の抜け漏れを洗い出させた。また、3年生4月の進研模試を5教科の記述力を測る試験と位置付け、国数英の完成度と6月以降の地歴・公民の学習の本格化に向けた現状を確認させた。

「1年生の頃から生徒に繰り返し伝えてきた通り、5月を国数英の完成期とし、6月には理科と地歴・公民の学習に目を向かせました」（木村先生）

橘高校では、生徒が自主的に学ぶ集団づくりと、教師による行き届いた生徒の把握により、教科バランスの取れた指導を実現し、例年同様の大きな成果を上げた。ただ、進路指導には課題が残ったと、宮本先生は話す。

「動機があいまいなまま志望大を決めてしまった中・下位層の生徒がいました。本当に学びたい学問や、それを学ぶのに適切な大学・学部を、もっとじっくり検討させるべきでした。新課程での教科指導と進路指導の時間を両立できるように、1年生の頃からキャリア教育にしっかり取り組む必要があると考えています」

2年生7月進研模試の低迷
学年団で危機意識を共有

普通科・理数科を有する兵庫県立加古川東高校は、15年度入試において、国公立大合格者が前年度の178人から219人に急増した。うち京都大合格者は前年比約3倍の14人、大阪大合格者は2倍の24名（いずれも現役のみ）という堅調な実績を上げた。躍進の起点となったのは、2年生半ばからの数学・理科の指導だ。7月の進研模試で数学の偏差値が大幅に下がり、学年団で危機意識が共有されたのを契機に、教科・進路指導を中心に軌道修正が図られた。当時、学年主任だった坂田充範先生は、「中だるみが顕著で、学習習慣が身に付いていない生徒が多く、

学習への目的意識も希薄でした。

このままでは秋以降、更に学力は下がり、11月の進研模試で大幅ダウンが予想されました」と振り返る。

8月上旬、学年団で緊急会議を開き、2年生後期以降の取り組みを検討。その中で、成績上位層の生徒を対象とした早朝補習の強化が改善案に挙げられた。同校では、月水金の7時35分〜8時25分に、希望者を対象に国数英を中心とした早朝補習を実施していた。それに加え、この学年では、2年生後期から木曜日に文系・理系（理数科を含む）の上位層を対象とした早朝補習を行うことにした。

「チームAAA」で
文系上位層を意識付け

文系上位層の生徒を対象とした



兵庫県立加古川東高校
坂田充範
さかた・みつなり
教職歴34年。同校に赴任して11年目。特別支援教育コーディネーター。



兵庫県立加古川東高校
松下博昭
まつした・ひろあき
教職歴28年。同校に赴任して5年目。1学年主任。



兵庫県立加古川東高校
福本寛之
ふくもと・ひろゆき
教職歴21年。同校に赴任して4年目。1学年担任。



兵庫県立加古川東高校
長野拓弥
ながの・たくや
教職歴9年。同校に赴任して6年目。1学年担任。

○「自治創造「明朗親和」を校訓とする。2006年度がスーパーサイエンスハイスクール指定校。○全日制／普通科・理数科／共学／1学年約300人○2015年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大などに268人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、関西学院大などに延べ543人が合格。

補習は、当時、地歴・公民科担当の藤原千佳子先生（15年度他校に異動）が主催した「チームAAA」だ。攻め（Aggressive）の受験を志向し、難関大をあ（A）きらめず、模試のA判定を目指す。その内容は、数学科の教師が提供する入試の過去問題を使った演習、日本史・

世界史対策、学習計画表のチェック、進路相談と幅広い。

「難関大を目指す生徒の学習意欲を高め、学び合う集団をつくるのが狙いでした。本校は、理系クラスの数が文系クラスの倍というところもあり、理系の生徒に圧倒されてしまう文系の生徒もいます。チームAAAは、『文系の生徒も手厚く指導する』という学年団からのメッセージでもありました」と坂田先生は語る。

2年生後期の化学補習で難関大の入試問題に挑戦

この学年では、新課程入試を見据えて、早い時期から理科重視の方針を学年団で共有。学年集会でも「早めに理科に取り掛からないと間に合わない」「先輩の情報をうのみにしてはいけない」と理系の生徒に呼び掛けてきた。

加えて、2年生後期からは、上位層、及び上位を目指す理系の生徒を対象に化学の早朝補習を実施し、京都大・大阪大などの難関大の入試問題に取り組ませた。化学科担当の長野拓弥先生は、「出来る

だけ早く、入試を意識させることが目的でした。新課程の化学では、計算力が必要な理論分野が教科書の前半部分で取り扱われることになったため、旧課程では3年生にならないうと出来なかった理論分野の演習が2年生で行えるようになりました。レベルの高い入試問題にもあえて取り組ませ、解答のために必要なアプローチや、授業で習得した基礎知識の活用方法を中心に解説しました」と語る。

補習の参加者は、普通科と理数科の生徒約20人。普通科と理数科の生徒と一緒に補習に参加したことは、生徒たちにとって大きな刺激になったと、副学年主任を務めた松下博昭先生は言う。

「これまで、普通科と理数科と一緒に学習する機会はほとんどありませんでした。この学年の理数科は早くから理数科目の成績が良かったこともあり、一緒に補習を受ける中で、普通科の生徒にも『負けてはいられない』という意識が生まれたのだと思います」

それまであまり質問に来なかった生徒が頻繁に質問に訪れるよう

になるといった、補習以外の場面での行動に変化が現れ始めたのもこの頃だ。2年生11月の進研模試は理科がけん引役となり、例年以上に偏差値が大きく伸びたという。

中・下位層の生徒に対しては、3年間を通して、定期考査前の質問会や考査後の指名補習などを実施し、手厚いサポートを続けた。また、9月上旬の実力考査で順調に受験勉強のスタートを切らせることを目的とした、夏休みの課題を登校日に提出し、確認する「キープ・アップ・プログラム」も実施。教科ごとに対象の生徒を指名し、教科担当が課題をチェックした。

低迷した数学は基礎・基本を徹底

2年生7月の進研模試で大きく偏差値が下がった数学は、基礎・基本の徹底を図り、改善。数学科担当の福本寛之先生は、「新課程の数学は学習内容が増えたため、数学科では1年生から進度を速めるという方針でした。しかし、定期考査ではなかなか得点が伸びず、7月の進研模試でも偏差値を下げ

てしまいました。我々も改めて基礎・基本の重要性を痛感しました」と語る。

そこで、数学科では、教科書の内容をしっかり定着させる方針を改めて共有。生徒には様々な場面で基礎・基本の重要性を呼び掛け、夏休みの課題も教科書レベルの問題に取り組ませることにした。

2年生9月以降の早朝補習は、7月模試で得点率の低かった分野であるベクトルの問題演習に特化し、理系と文系に分けて10月の定期考査まで6回の補習を実施。更に、「数学Ⅱ・B」の教科書が終わる時期を見計らい、自主課題としてセンター試験の問題を中心とした自習プリントを全員に配布した。

理数科目の指導を軌道修正し、成果を上げた同校だが、残された課題もあるという。

「例年、課題や補習にきちんと取り組んでいるにもかかわらず、最後に力を出し切れない生徒がいます。そうした生徒が頑張っただけの成果が出せるように、今後も生徒たちを支援していきたいと思えます」(坂田先生)